

書評・新刊紹介：ナタリーってこうなったのか

林, 豊
九州大学附属図書館eリソースサービス室

<https://hdl.handle.net/2324/1500401>

出版情報：情報の科学と技術. 65 (4), pp.195-195, 2015-04-01. 情報科学技術協会
バージョン：
権利関係：<http://www.infosta.or.jp/journal/copyrightkaitei060719.pdf>





ナタリーってこうなったのか (YOUR BOOKS 02) [Kindle 版]

著者 大山卓也

発行 双葉社 2014 年 9 月

価格 [Kindle 版] 800 円,
[単行本] 1,080 円

驚いた。ナタリーってこんなにも「ちゃんと」したメディアだったんだ。

ナタリーは 2007 年 2 月に誕生した「ゆるふわ愛され系」(自称) 音楽ニュースサイトである。今や月間 3,000 万ページビューを超えるほどなので、一度くらい Twitter かなにかで好きなアーティストの記事を見かけたことがあるのではないと思う。映画『モテキ』で主演・森山未來の勤務先として登場したのも話題になった。現在では音楽だけでなく漫画とお笑いというジャンルにも手を広げている。

本書はそんなナタリーというサイトの「本質」を、共同創立者のひとりである大山卓也さん自身が探っていくというものである。探る？ 実は彼もよく分かっていないらしく、「不思議なサイトになったもんだ」と言っている。のっけから超有名サイトの代表らしからぬゆる〜い感じが漂い、それがいかにもナタリーっぽいなあとなやなやしてしまう。

序盤は大山さんの生い立ちから始まる。幼少期は「ごく普通」だが「だいたい凝り性」で「好きになったもののことはなんでも知りたがる」子供だったという。高校ではバンドを組むほどの音楽ファンなのに、「表現欲のようなものもまるでな」くて、大学卒業後に音楽方面で就職したいとは一切思わなかったらしい。「なんとなく親しみやすい」から某「パン屋」に就職し、「なんとなくかったるくなって」2 年で退職した。……とても起業しそうな人には見えない。その後、新聞求人欄で見かけたゲーム雑誌編集者の仕事に就いたところ、「何もかもが新鮮で楽しくて」「性に合っていた」。人生の転機。その後異動でウェブメディアを担当した経験を活かし、「世の中にあふれる音楽情報のすべてを集めたい」という想いで個人ニュースサイト「ミュージックマシーン」を立ち上げる。これが人気を博し、ナタリーの誕生へつながってゆく。

ナタリーのメディアとしての強みは、表面的には、ウェブゆえの速報性と記事セレクトの独自性にあるだろう。独自性の例として本書では「明日の『笑っていいとも!』に奥田民生が出演」という記事が挙げられているが、ほんとファン以外には正直どうでもいい(すみません)、でもファンなら心から感謝を捧げたいような細かいネタが多い。そんな「ファン目線」がナタリーの持ち味である。記事の更新件数も多く、現在では 1 日で 100 件にもなるという。そのため読者から「キモい」「過剰」と(たぶん愛をこ

めて) 言われることがあるそうだ。

しかし、考えてみればこんな「キモ」さや「過剰」さは生半可な根性で維持できるものではない。大山さんはどういう人間なのか。いったいなにが彼をそうさせるのか。

本書のヤマ、第 3 章「ナタリーがナタリーである理由」では、「真っ当なメディアでありたい」「公平でありたい」という大山さんの愚直な信念が独特の熱でもって語られ、ナタリーのまとうゆるふわなイメージが次々とはがれ落ちていく。曰く、ページビュー稼ごの釣り記事や手抜きのコピペ記事は書きたくない。みつともないことはしたくない。ちゃんと取材をして、ちゃんとした日本語を書き、ちゃんと校正をしたい。この記事は誰も求めているかもしれないけれど書くべきだ。偏りのないフラットなメディアであるために記事の数を増やす、全部やる。他の追随を許さないほどのぶっちぎりのメディアでありたい。ゆるく見えてもぬるくやっているわけではない。——大山さんのこんな矜持は、(性格によるところも多分にあるのだろうけど) 紙の雑誌という「オールドメディア」の編集者時代に培われたようだ。

巻末の対談では、同じく共同創設者である津田大介さんが「差別化の源泉がどこかにあるとしたら、『ちゃんとしたい』と思ってるのになんじやないかな」と述べている。やはりこの「ちゃんと」こそがナタリーをナタリーたらしめているようだ。なんとも不思議なことに。

本書を読み進めていっても大山さんにつかみどころのなさを感じていたのだが、後半、彼のメンタリティが鋭く伝わってくる一節を見つけた。「たとえ平熱であっても熱は熱だ。その内側では、平熱を維持するための何かが燃え続けているのだと思う。ただ、それをわかりやすい形で表に出すのには抵抗がある」。なるほど、こういうひとだったのか。

私も数年前、朝から晩まで毎日図書館ニュースブログを書くのが仕事だったことがある。本書に散りばめられた「どこよりも早く濃く」「ただコツコツと」「365 日ずっと休まず」「見えないゴールに向かって走り続けるだけ」「まだまだ足りない」「いつまで経っても網羅できないまま」といったフレーズには、当時を思い出しつつ共感しすぎて笑ってしまった。(同時に、自分は大山さんほど「ちゃんと」を徹底できてなかったと深く反省もしたのだが。)

これはちょっと特殊な例かもしれないけど、図書館の仕事というのは煎じ詰めればブログと同じ「情報発信」なのだと言えるんじゃないだろうか？ たしかにそこで扱う情報のほとんどは自身で生み出したものではなく、図書館はただそれらを仲介するだけの存在にすぎないのかもしれない。でも、「どんなにいい音楽も、生ギター一本で届けられる範囲は限られている。より多くの人に届けるためにはどうかアンプが必要だ」。

(林豊 九州大学附属図書館 e リソースサービス室)